

令和3年度学内版 GP 成果報告書

取組名称	ICT を活用した体系的な海外研究留学事前・事後教育プログラムの開発と大学院英語教育への接続システムの構築
実施組織 (または対象のカリキュラム)	繊維学部
※連携する他学部・機関がある場合は記入	なし
実施責任者(所属)	小林 俊一 (繊維学部国際交流推進室)
取組の目標	<p>繊維学部の学部学生の約 7 割が修士課程に進学し、コロナ禍以前まで研究を主目的とした交流協定校への交換留学希望者が増えてきた。そこで本取組では、このことを踏まえて「英語を的確に理解(聴・読)し、英語で迅速に対応(書・話)できる実践的コミュニケーション力を有する技術者を育成する学部及び大学院(修士・博士)のカリキュラムの構築」を最終目的としている。</p> <p>しかし、これまで高学年次における英語学修のモチベーション維持が大きな課題であった。そこで本取組では、協定を結ぶ国際連携校と協力した ICT を利用した「海外研究留学事前・事後教育プログラム」の開発を行い、特に本学部高学年次生(主に修士課程進学が決定している学生を対象)における主体的学修意欲を維持させることを目標とする。</p>
1. 目標達成のために行った活動と成果 (箇条書きで項目ごとに番号を付けて記載。成果の詳細は必要に応じて別添とする)	<p>① 本カリキュラムでは、協定校の一つであるドイツマンハイム工科大学 Matthias 教授と協力して、ICT を活用した海外ブランチオフィスのスタッフとの face to face の数回の面談や留学前の準備、スーパーバイザーとの face to face の数回の研究打ち合わせなどを含む留学前教育プログラムを開発することであった。しかし、今年度もコロナ禍が猛威を振るっているために当大学に留学する学生がおらず、プログラムを実施することができなかった。ただし、オンラインでの実施体制として、昨年の学内版 GP において調査した「COIL (Collaborative Online International Learning) 型教育」を利用する方法を構築しようとした。COIL は松本キャンパスにある本学グローバル化推進センターでもサポートしている (SU-COIL)。その実施にあたり、必要に応じて機材を借りることが出来るが、キャンパスが離れているために実質的に困難であることから、上田キャンパスでも問題無く使用できるよう、設備 (ビデオ会議システムとノート PC) を用意した。</p> <p>② 学生の TOEIC 教育のために書籍を購入、図書館で開架させた。また、取組のよい部分を普及させるための組織的 FD 活動として、TOEIC (LR および SW) の指導・教授法について、TOEIC の実施団体である「国際ビジネスコミュニケーション協会」が開催する教員向けワークショップに参加した (「TOEIC Speaking & Writing Tests を活用した英語発信力強化の動機付けと仕組み作り」参加者：小林、今年度はコロナ禍のためオンラインで開催)。</p>

<p>2. 目標達成度に関わる所見と今後の展望</p> <p>(達成の度合いを選び、そう評価する理由と今後の展望を記述)</p>	<p>d. おおよそ達成できなかった</p>	<p>(評価理由)</p> <p>上田キャンパス COIL 用の機材の充実とFD 活動のみで、本来の目的は達成できなかった。</p>
		<p>(今後の展望)</p> <p>次年度からはウィズコロナであっても海外に行く留学生が増えることが予想される。既にマンハイム工科大学からは2名の留学希望者がおり、手続きを開始した。まずはマンハイム工科大学 Matthias 教授と教育プログラムを開発し、他の協定校とも応用ができるように一般化していくカリキュラム開発を目指す。そのために今年度に用意した機材を用いることは有効であると考えている。</p> <p>この効果として、学生が本プログラムに主体的に参加することにより、大学院進学後の海外留学へのモチベーションが維持され、海外留学への不安解消や研究準備などがスムーズに遂行できると期待される。さらに、帰国後に留学を振り返り、「留学自体を自己評価」し、次への留学のステップを持つこと、「これから留学を志す学生へのプレゼン」や「広報活動」などをする「海外研究留学事後教育プログラム」としての実施を行うことにより、将来的にはカリキュラム化し、修了した学生には学内資格を与えることも検討していきたい。</p>